

発掘調査の概要

藤原宮大極殿院の調査(飛鳥藤原第200次)

都城発掘調査部(飛鳥・藤原地区)では、藤原宮中枢部分の様相をあきらかにするため、大極殿院の調査を継続的にこなっています。前回の奈文研ニュースNo.74でもお伝えしたように、今年度は大極殿東北部に調査区を設定し、東面北回廊の柱位置の確定、内庭部の整備状況、そして藤原宮造営過程の解明に取り組む目的で調査を進めていました。

従来、藤原宮大極殿院北方は礫敷広場だと考えられてきました。そのため、今回の調査区は、東端では東門の北延長位置で東面北回廊を確認し、西端では、藤原宮造営時に資材を運搬する目的で設けた運河と、そこに取り付く溝の検出を予想していました。

ところが、建物はなかったと思っていた大極殿北方から、回廊を新たに発見しました。この回廊は東面北回廊から大極殿側へのびることから、大極殿北方は回廊で画されていたことが判明したのです。

大極殿院の東を画する東面北回廊は、桁行14尺等間、梁行10尺等間で北へのびます。ところが2間のみ、桁行を10尺等間に変更していました。当初は柱位置の乱れだと考えていましたが、今回新たに発見した(仮称)大極殿後方東回廊の礎石据付痕跡が1基、1基と姿を現すにつれ、この柱間寸法の意味が判明しました。東面北回廊は、大極殿後方東回廊が取り付く2間分のみを、その梁行寸法にあわせて調整していたのです。このことから、両回廊は一連の造営計画のもとで柱位置を決定していることがわかりました。両回廊の礎石は抜き取られ、礎石を据え付けるための根石等が残るのみでした。



調査区全景(南西から)

また、大極殿北方からは、東西にのびる掘立柱塀も検出しました。この柱列もまた、大極殿院を区画する施設であったと推測できます。

今回の調査では、回廊基壇裾にいくつも掘られた溝にも頭を悩まされました。これらは造営時の区画や排水を目的としたものですが、溝が思わぬところで曲がり、複雑に組み合う状況は、造営過程で溝を何度も付け替えていった様子が推測されます。調査区の西端では、運河に取り付く溝を新たに検出しました。基壇裾の溝と同じように、大極殿院の建設過程に伴い設けたものと考えられます。

今回の調査では、従来空地と考えられてきた大極殿院北半部の空間に、院を南北に画する回廊の存在があきらかとなりました。同様の施設は、前期難波宮の内裏を区切る東西棟建物にみられます。かねてより、前期難波宮と藤原宮はその規模や構造において類似性が指摘されてきましたが、今回の発見により、両者の強い関連性にくわえて前期難波宮からの連続性がより鮮明になったといえます。これは、藤原宮だけでなく、都城研究に関して問題を投げかける、重要な成果です。想定外の位置からの想定外の発見。礎石据付穴のかすかな痕跡を頼りに柱位置を確定し建物を復元する作業は、難しいものでしたが、古代都城史を塗り替える重要な発見に立ち会うことができた調査でした。

10月6日には現地説明会を開催し、971名の方々にその成果をご覧いただきました。

今回の調査で新たに生じた課題を解明するため、藤原宮大極殿院の調査はこれからも続きます。今後の調査にどうぞご期待ください。

(都城発掘調査部 松永 悦枝)



大極殿後方東回廊の礎石据付痕跡(西から)